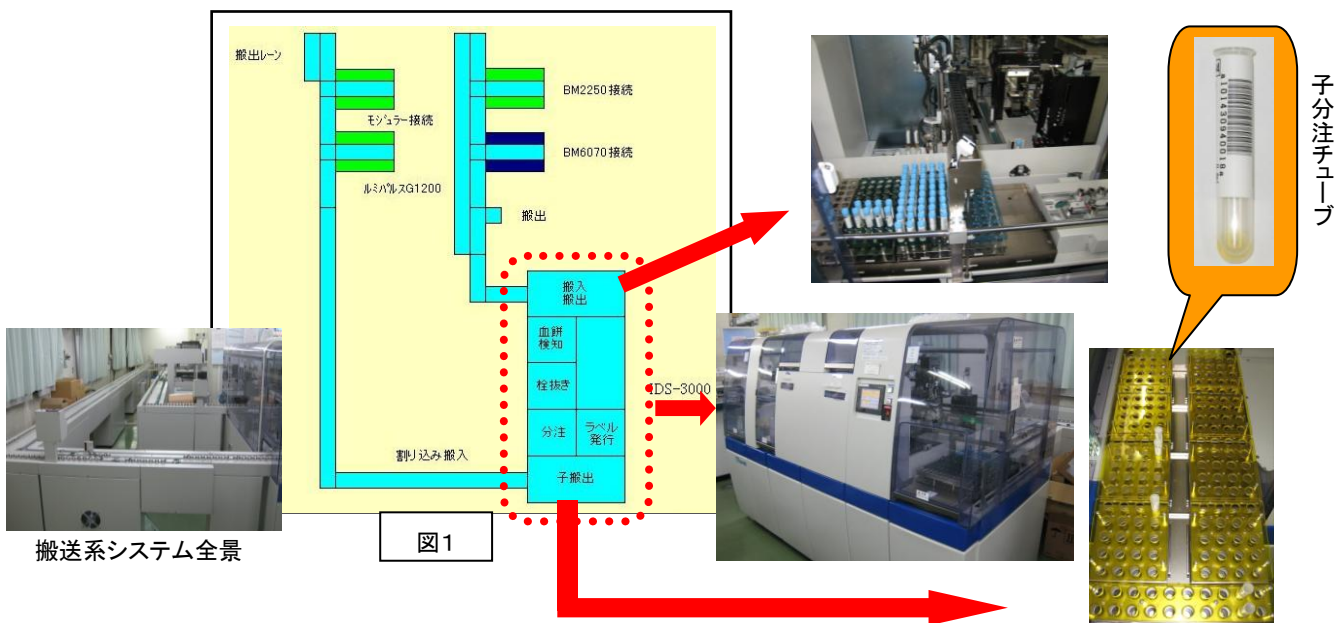


Lab News

テーマ 搬送系システムの紹介とその効果

搬送系システムは検査の効率化を目指すことを目的とし、複数の臨床検査機器と搬送ラインを繋いだシステムの総称をいいます。

当院に導入されたIDS搬送系システムは、2010年5月6日より稼働しています。病棟及び外来採血室にて採血された検体は、全て3F検査部受付・進捗エリアに集配され、採血検体のバーコードをスキャンして到着確認(検査室に届いた証明/アリバイ:検査室到着時間を管理する)し、TAT(Turn Around Time)が管理されています。自動分析用採血管は遠心分離(3000rpm・5min)し、遠心分離後検体(親検体)をIDS搬送ラックにセットします。親検体は自動開栓され、検査目的または測定機器別にチューブに子分注されます。このIDS搬送系には、生化学分析機の2台(BM2250・BM6070)と、免疫分析機のG1200及びEEモジュールが接続されており(図1)、各分析機で依頼項目に沿って分析されます。それは搬送系システムを連動させた巨大分析機といえるかもしれません。



<搬送系システム導入効果>

- (1) 作業動線の複雑さが解消され、技師が複数機器の業務を効率的に行え、大型分析機エリアの配置人数を削減できた。
- (2) 各分析機器への架設時間の遅延が解消された。
- (3) キャップ開栓による感染危険性を削減できた。
- (4) 外注項目用プレーン管採血が不要となった。(採血管本数の削減)
- (5) 外来採血受付から60分以内の結果報告が可能となった。